

春の彼岸によせて

平成二十九年三月 大乘寺 長老 岡 光俊

この冬の早朝、気温は〇度前後が三ヶ月以上続き、今まで以上に春の訪れを待ち遠しく感じます。

また、毎年のこととはいえ、ご先祖さまがたも桜の開花と共に皆さまの参拝を心待ちにされておられます。

昨年「春の彼岸によせて」より、墓参りのときには必ず手向ける榊や柵、卒塔婆のお話をさせて頂いて頂きましたが、今回は、ロウソクについてお伝えさせて頂きたく思います。

「長者の万灯より、貧者の一灯」という言葉があります。これは『賢愚経』に示されている「もろもろの燈明ごとく滅したるも、ただこの燈のみひとり消えず」から生まれた言葉といわれています。

お釋迦さまご在世の頃、難陀という貧しい女人がおられました。彼女は毎日食物を乞い歩いて生活していました。あるとき祇園精舎でお釋迦さまのご説法があり、国王や大臣、金持ちたちが、お釋迦さまに燈明、金品を供養することを知りました。私も燈明を供養することはできないものだろうかと思ひ、ある日、一日中歩いてようやく一銭を得ました。

それを持って油屋に行き、「燈明の油を一銭分下さい」というと、油屋は難陀に尋ねます。「一銭分の油では用が足りないだろう。いったいこれをどうするのかね」。すると難陀は「私は貧しくて、ほかの人のようにお釋迦さまに色々供養することができません。せめて、小さな燈明でも捧げようと思います」。

これを聞いた油屋はその心に感動し、油を二倍にして与えました。難陀は喜んで祇園精舎に行き、お釋迦さまに燈明を捧げながら「小さな小さな燈明にも、もしも功德があるのなら、来世には明るい智慧を持って生まれ、一切衆生の苦しみを取り除くことができますように」と呟いてその場を去りました。

説法が終わり、夜中を過ぎ、ほかのすべての燈明は全部消えてしまったのに、この難陀の燈明だけが消えませんでした。

お釋迦さまは「かの女人の美しい心は、佛の心と等しい。故に大海の水をもつてしても、永久に消えることはないのです」。

『真心の灯は、永久に灯り続けるものなのです』

この真心とは、「この次に生まれてきたときには、あらゆる衆生の苦悩を救いたい」というもので、これを「大菩提心」といい、お釈迦さまの心ということです。自分の幸せよりもすべてのものを幸せにしたいという願いを起こし、その願いを持ち続けることです。生きる先を照らして下さる道標を頂いたかたは、迷いなく力強く生きてゆくことができます。

灯明は命そのものを表します。また、お釈迦さまの教えを文字にした経文をも表します。それらの象徴として灯明が使われてきたのです。

そのほかにも、絶やすことなく教えを後生に続けていく象徴として、比叡山根本中堂の常灯明は、寛永十九年以来消えることなく伝教大師最澄の教えを引き継がれている灯明として、よく知られています。

春の彼岸、本堂前にロウソクを寄進し、ご本尊さまに長年、ご先祖さまをお守り下さっていることのお礼をし、そのうち墓参りのときにロウソクを手向け、佛さまの教えを頂き、ご先祖さまに一步先を歩んで頂き、ご先祖さまが照らして下さる人生の路を真っ直ぐ歩ませて頂きましょう。

合掌